



吉野川観光 やな漁

9月15日～10月下旬
 弥生時代のやな漁を体験しよう

《やなオープニングセレモニー》

- 日時 9月15日(土)午前11時30分から
- 場所 吉野川大川橋下流右岸(新町側)

やな漁とは・・・

秋口に産卵のために川を下る習性を利用した漁獲量の多い大規模な漁法。

川幅を少し狭くして、兩岸にまたがるように槽(やぐら)を組み、その上に竹で編んだ簀(す)をつかって、川の流れと共に簀の上に自然に落ちるアユを生け採るというものです。

この仕掛けを梁(やな)といいます。

全国においてもめずらしい、このやな漁この機会にぜひ体験してください。

- 主催 吉野川やな漁保存会
- 後援 吉野川活性化プロジェクト
- 問合せ 吉野川やな漁保存会
 (五條市漁業協同組合内)
 ☎25・3077

やな漁に「まことちゃん」登場

今年のやな漁ポスターには「まことちゃん」が登場します。これは五條市出身の漫画家模図かずお先生の監修のもと作成されたもので、五條市観光PRの強力な応援団となっています。

模図かずお(うめずかずお)

1936年高野町で生まれ、五條市で育つ。幼年期から、絵を描くことに非凡な才能を発揮し、五條小学校4年生の時漫画を描き始めた。14歳の時に描いた「森の兄弟」と五條高校2年の時に描いた「別世界」が1955年に出版されプロデビューを果たす。代表作に「へび少女」、「まことちゃん」、「漂流教室」、「14歳」

新町と松倉豊後守重政

まつくら ぶんごの かみげ まさ

第6回 「松倉豊後守重政の死」

前回は、松倉豊後守重政が島原に入封したころの、キリシタン弾圧や外国貿易の制限など、島原周辺の出来事を中心に述べました。今回は重政の治政についてお話しします。

その後江戸幕府は、外国宣教師がまだ多数各地に潜伏していること、また、再入国する者が後を絶たないことを知り、宣教師の探索と捕縛を一層強化して「元和の大殉教」【元和8(1622)年7月、長崎で55人処刑】を起こしています。このころ、重政は三代将軍徳川家光に呼び出され、キリシタンの管理について詰問されたようです。それまでの対応が手ぬるいと見なされたのでしょう。ここに来て松倉重政もキリシタンへの弾圧を強めざるを得なかったようです。いやむしろ、松倉家の存亡にかかわる一大事として切支丹弾圧に容赦がなくなってしまうかのようです。家臣に命じて、後に悪名高い雲仙地獄での拷問をはじめています。

寛永4(1627)年に至り長崎奉行も雲仙地獄での拷問を採用し、棄教、転宗、いわゆる転ばせるための過酷な拷問をおこないましたが、拷問に耐えて殉教する者も多く出ました。幕府はむしろ信者が殉教して栄光を得ることを喜ばず、翌5年には責め苦の方法を替えて(たとえば絵踏等)転ばせることに主眼をおくようになったとされています。

禁教令が発布されたころより、朱印船貿易は徐々に統制されて参ります。すでに慶長14(1609)年、藩による大船建造の禁止令

が出され、さらに貿易港を平戸と長崎に制限したことで、西国大名による朱印船貿易が事実上不可能となりました。遅れてきた重政も西国大名の例にもれず、海外貿易に強い関心を持っていたようです。長崎に家臣を常駐させ唐物類を購入したとの記録があり、長崎代官や長崎の有力者と協同出資で朱印船を何度か出したとの記録も残されています。また、元和7(1621)年に平戸のイギリス商館に重臣を遣わし、できる限りの便宜と必要ならば金銭的援助も惜しまない旨を伝えさせたとの記載もみられます。いずれも、重政の海外貿易への強い意欲を示す話です。

寛永7(1630)年11月11日、松倉重政は当時の長崎奉行竹中采女(うねめ)と共同で、国情偵察のために二艘の船を呂宋(ルソン・現在のフィリピン)に向け派遣しています。当時呂宋はスペイン(スเปน)の植民地となっており、日本に潜入してくるキリスト教宣教師の供給地として、江戸幕府は早くより強く警戒してきた土地です。松倉らは、幕府の了解のもと、呂宋遠征のための偵察隊として船をマニラに派遣したようですが、松倉豊後守重政は船が発した5日後の11月16日、島原半島の小浜温泉で急死しています。暗殺説も含めて死因は定かではありませんが、重政の死により、呂宋遠征の話は沙汰止みとなったようです。松倉豊後守重政57歳、島原入部後14日目、島原の乱(1637年)の7年前のことでした。

(参考文献：長崎県史編集委員会編集「長崎県史」)
 (新町と松倉豊後守重政400年記念事業実行委員会委員長 榎野久春)